
緋弾のアリア～殺戮の転生者～

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～殺戮の転生者～

【NZコード】

NZ176Z

【作者名】

麒麟

【あらすじ】

箱庭学園3年13組『枯れた樹海』こと宗像形。
(ラストカードベジット)

異常な殺人衝動を持つ彼がなんと『緋弾のアリア』の世界に転生した！！

神から貰つた人を殺さない為の能力と殺すための技術。

それらを駆使し、

彼は自身の異常を制御出来るようになる。

そして彼は神崎・H・アリアに目を付けられたり、

遠山キンジの部屋に居候したり、死闘を繰り広げたり、
そんな毎日を過ごすのであつた。・
これは絆弾のアリアとめだかボックス（宗像のみ）の一次創作小説
です

序章 転生した殺人者

目が覚めるとそこには真っ白な世界が広がっていた。

「目が覚めたか？」

振り返るとそこには帽子を深く被り、腕組している天使？みたいな奴がいた。

どうして天使かと思ったのか、それはこいつに大きな翼が生えているからだ。

「なぜかわからないような顔だな。説明してやるつ。簡単な話、お前のいた世界は消えてお前は死んだ」

「死んだ？ならなぜ僕だけがここにいる

「俺がお前を呼んだからだ」

「人吉君達は死んだのか？」

「ああ、死んだね」自称神は答えた。

「まあ、よく分かった。で？僕はどうすればいい

「とりあえず転生してもらう。何処がいい？選べ

すると僕の前に書類らしきものが現れた。

一つとつてみると「緋弾のアリア」とかかれた紙が入っていた。

「面倒だからこれでいい

「おいおい、自分の生きる世界だぜ？そんな適当でいいのか？」

「僕は人を殺さなければそれでいい」

「やれやれ・・・それじゃ俺からアパートをもらひ。」ハハハハハ

「そいじゃ、ちょっと動くなよ・・・」「自称神は僕の額に指をあてた

「何をした？」

「お前が人を殺せないようにして」

「本当か？」

「本當だ」

「まい」

「その世界に行くなら武器が必要……つてお前には必要ないか。

「」れは・・・ベレッタ90-Twoか?」

「よく知ってるな。俺からお前への2つ目のプレゼント。ついでに、クラスは2年A組。一般校からの転校生って事にしておいた。

学力は前の世界を引き継ぐからそのまま。それじゃ、行つて来い」

「あまり気乗りしないが・・・仕方ない」
その瞬間、世界は真っ暗に変化し意識が飛んだ。

「宗像形・・・さりばだ」

第1幕 殺戮者の始動

「U.N.I.J.はどこだ？」

辺りを見渡すと住宅地が広がっていた。
そして、一際異彩を放つ学校が見えた。

(あれが学校か?)

とりあえず、そこに向かつて歩いていった。

「そういえば、あの神僕に殺さない能力」とか言つてたけど本
当か?」

半信半疑で考えていると
(あれは・・・)

イスラエルI.M.I社の短機関銃U.N.Iだ。
セグウェイに搭載されている。

(なぜこんな住宅地に・・・)

そんな事を考へているとU.N.Iは僕の頭に標準を向けた(様に見え
た)

「頭を狙つてるな、仕方ない破壊しよう。転生して1発目は・・・

R.P.G.7『これ』だ」

ドオオオオオオン!!!!!!

轟音を立て、セグウェイは吹き飛んだ。

「派手すぎたか？」

幸い、周りにはいなかった。

すると後ろから爆発音が聞こえ、パラグラライダーが体育館に突っ込んだ。

「気になるし、見に行こう」

体育館の中に入ると何もない

(？おかしいな)

するとヒタチのコニーがまた来た。

すると飛び箱の中からコニーへ銃口を向ける少女がいた。

僕に気づいたのか彼女は

「さつきの爆発はあんたね？手伝になさーーー！」

「僕は傍観させてもらひよ。だから手伝わない様は面倒だからだ。

「その制服・・・武道高のでしょ？」

「今日から転入してきたんだ」

「だったらあんたも手伝いなさい……。」

あれ？ わざわざ手伝わないと云つたのに・・・。

突然、今まで何もしてなかつた男の・・・
気配が変わつた。

例えるならば猫が虎にでもなつたような・・・

男は少女を抱きかかえると、

跳躍し、銃弾の届かない非殺傷距離まで飛んだ。

そのままCNCの方へ向かつて行き、全てのCNCを破壊した。

僕はその様子を無言で見ていた。

そして、彼はそのまま歩いて行こうとした。

僕は彼の頸動脈を狙つた。

かつての世界でめだかさんにしたよつ。

予想通り、彼は避けた。

一番驚いていたのは彼女だ。

「なつ！？ 何してんのよー！ あんた今・・・完全に殺す氣だつたじ
やない！？」

「君、なかなかやるね」

「これぐらいなら強襲科で何度もあつたからな
アサルト

「強襲科？」
アサルト

聞きなれない言葉だ。

恐らくは学校の事だろうが……

「君とはい友達になれそうだ」

「奇遇だな。俺もだよ」

こうして僕は2人と出会った。

第2幕 仏頂面の転校生（前書き）

実際、宗像さんは3年ですが2年で捻じ込みました＾＾；
ちなみに元の学校は帝学院といつ所にしました（適当に考へた学院
です）

第2幕 仮頂面の転校生

転校早々遅刻した。

まあ別にどうでもいいし。

(確か2年A組だったか?)

僕がかつていた「十三組の十三人」・・・すなわち十三組は登校義務がなかつた為、普通に学校に通うのは随分久々だ。

さらばに転校生という事もあり、廊下で待たされた。

ついでに言ひと、今朝のツインテールと一緒に。

「…。」

「…。」

しばらく無言が続き、

「ねえ、アンタ・・・」「話を切り出したのは彼女だ。

「今朝のアソツ、本気で殺すつもりだったの?」

「それがどうかした?」

「どうもひつもないわよーー『武偵は人を殺してはいけない』武偵法9条にあるでしょ？」

「僕は彼が避けると分かつて殺そうとしたんだ。なにか問題がある？」

そう言った所で先生が僕達の事を呼んだ。

話は途中で終わり、僕に続いて彼女も教室に入った。

先に彼女　今分かったがアリアといひりしげ　が自己紹介をし、
彼にベルトを返却した。

それで騒がしくなり、彼女が銃を発砲してから自己紹介をした。

「始めてまして。帝学院から転校してきた宗像形です。学科は強襲科
に入ろうと思つてゐる。

よろしく

色々な言葉が聞こえてきたがとりあえず無視しよう。

「宗像君は神崎さんみたいな希望はある？」

「特にありません」

「それじゃあ・・・峰さんの隣が空いてるからそこに座つてね」と
先生に指示された。

「峰さん・・・だけ?よろしく」

「理子でいいよ　えーと・・・宗像君だから・・・ムー君だ!よ

ろしく…」

変なあだ名をつけられた。

休憩時間には転校時恒例の質問攻めだった。

「部活どこに入るの?」「帰宅部だ」

「武器は何使ってるの?」「小型拳銃各種に大型オートマチック拳銃多數、狙撃銃、ミサイル、手榴弾に槍や狼牙棒とか使ってる」

みんなが揃つてもしかして千剣千銃?とか言つていて

間違いではない。今のも手持ち武器の1~3も言つてないから。

それから学校が終わり、先生に男子寮の場所と部屋を言われ、そこに向かつた。

住人が居るようだから一応、チャイムを鳴らした。

「はいはいじりあいま・・・つて転校生の・・・確か宗像だっけか?
話は聞いてる。まあ入れよ」

「そうさせてもううよ」

そして部屋に入った

第3幕 アリアの奇襲

部屋の中に入ると、長い廊下、そして部屋が結構あった。

「他に誰か住んでるのか？」

「いや、俺1人だ」

こんな大きな部屋に1人とは・・・まあ驚きはない。

「『』の寮に来たときに一緒になるルームメイトが偶々いなくてな。俺1人で暮らしてる」

「へえ」

僕は暇潰しに日本刀約30本取り出して手入れをする。

すると

「お前そんな武装じ『』しまつてるんだよ・・・」

「『』の位まだまだ序の口だよ。僕はまだ手持ちの武装の1／10も出してないしや」

「お前一般校からの転校生だよな？」

「遠山。僕を疑ってるのか？」

「いや、疑つてないが一般学校にいる生徒の持つてるもんじゃねえだろ」

「ん? なんだこの銃弾」

見たこともない銃弾が6発入っていた

「それ武偵弾じゃねえか。分からぬのか?」

「初めて見る」

「右から炸裂弾、燃焼弾、闪光弾、音響弾、硫酸弾、後これは武偵弾じゃないが法化銀弾・・・だな」

この銃弾、相当高価だな。

ピンポーン

ガチャ

僕がドアを開けると、何もない(はずだ)。

ドアを閉めようとすると

「ちょっと!! 私がいるでしょ!!」

今朝にあつた少女がいた

「まあ、いいわ。トランク運んどきなさい」

玄関の前に置いてあつたトランクを運び、部屋に戻ると、

ツインテールを翻して、少女は言つた

「あんた達私のドレイになりなさい!!」

第3幕 アリアの奇襲（後書き）

大掃除、めんどうだなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176z/>

緋弾のアリア～殺戮の転生者～

2011年12月29日19時47分発行